

文理融合の専門教育で育む 「社会で活躍できる力」

青山学院大学

青山学院大学社会情報学部は 2008年度の開設当初から、

「社会で本当に役立つ力を育成すること」を教育の目的にしている。

企業や自治体が抱える問題に文系、理系の分野を越えて挑む授業を通じて、

学生は社会に関心を持ち、課題解決力を身に付ける。

専門教育がキャリア支援を担う事例として紹介する。

文理混成型の授業で 弱点を補完し合う

2008年度、青山学院大学相模原キャンパスに開設された社会情報学部が重視しているのは、文理双方の知識を兼ね備え、社会で発生する多様な課題を解決できる力だ。企画力を備えたプログラマーや、統計学の手法を用いてデータ分析ができる営業担当者など、文理融合のスキルを持った人材を育成している。

情報科学系科目の統計学、コンピュータプログラム、数理学に、経済学、経営学などの社会科学系科目、心理学などの人間科学系科目を加えて基盤科目とした。これらの知識を基に実践力を高められるよう、多数の演習科目がある。

中でも学生の大きな成長の場となっているPBL科目が「プロジェクト演習」だ。商品の海外戦略や、学生向け販売キャンペーンの立案など、企業が直面している課題の解決にグループで挑む。課題の提供元となる企業は、東証一部上場メーカーから学生食堂を運営する大学の関連法人まで、教員があらゆるつてを頼ってかき集めた。

文系科目、理系科目のどちらか一方を得意とする学生も、両者が混ざった授業の中で互いの弱点を補完し合いながら課題に取り組むようになる。4年生による授業評価では8割前後の学生が、コミュニケーション・スキル、問題解決力などが身に付いたと回答（図表）。この値は全学平均と比べても非常に高い。

企業や自治体から授業での提案が高く評価されることもある。学生たちは「授業で学んだ知識は実際社会で生かせる」「自分たちの提案が社会の役に立ち得る」という自信を得ながら、学びへの意欲と社会への関心を高めている。

学生を高く評価し、複数年にわたって採用を検討する企業も多く、同学部は学内トップの就職率を誇る。学部長の稲積宏誠教授は「文理両方のスキルと社会で役立つ実践力を身に付けた本学部の卒業生は、どんな業界・職種でも活躍できると信じている」と言う。

学部の特徴を 教員チームが企業に説明

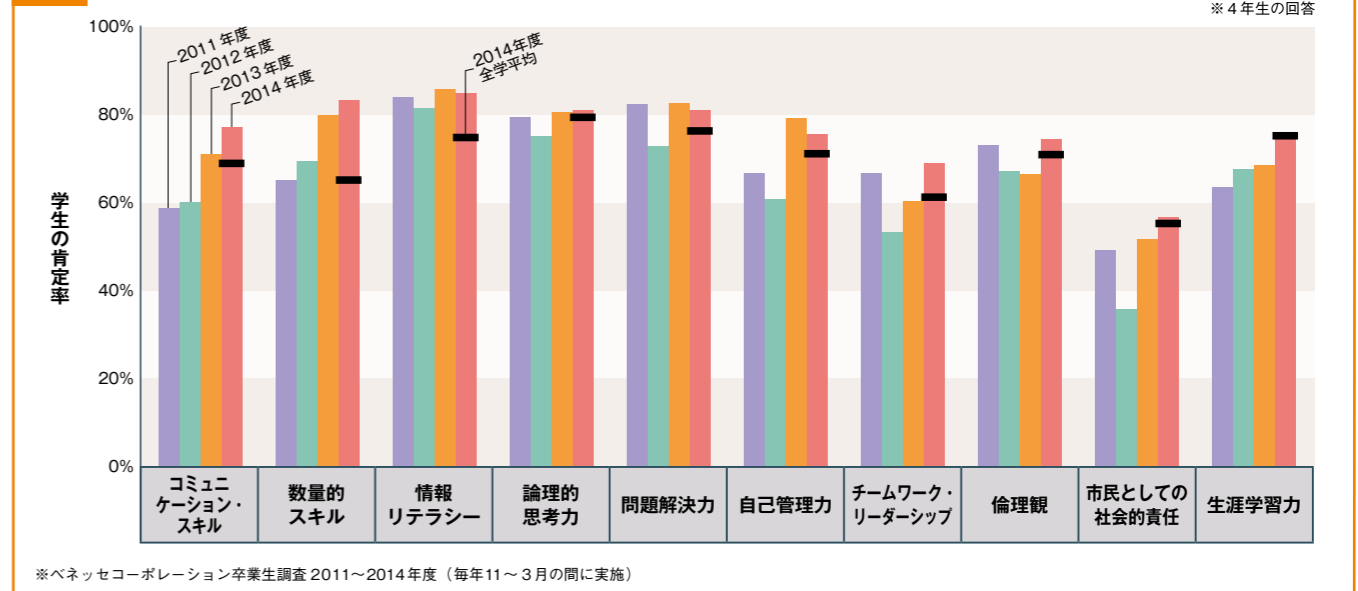
同学部は開設当初から順風満帆だっ

たわけではない。通常、高校や大学では学びの分野が文系、理系に二分され、生徒や学生は自分が文理どちらかに属するという意識を持ちがちである。そのため、同学部のコンセプトは受験生や高校教員に理解されにくいという問題があった。入試では数学が選択制で、選択しなかった文系の受験生については、入学後に数学的思考を修得させるためにきめ細かい支援をしている。

新設学部であるため、企業からの認知度が低いという問題にも直面した。「社会で役立つ力が身に付く」と謳ったからには、1期生から成果を出さなければならない」と、教員4、5人で就職担当チームをつくり、企業向けの学部紹介パンフレットを制作。就職支援をキャリア支援の部署に任せるのではなく、教員自らが企業訪問をして、学部のコンセプトやカリキュラムの特徴を人事担当者にアピールした。また、職員の協力を得て企業人を大学に招き、授業を公開。学生が研究成果を英語でプレゼンテーションする様子などを見せた。

「学部教育そのものが、社会で役立つ力の育成になっている。だからこ

図表 授業を通して身に付いた力



そ、特別な場を設けるのではなく、普段の授業を見学してもらいたいと思った」と稲積教授。

「文理両方の知識を学べる」という社会情報学部の特性は、学生の目的意識の弱さという問題も生んでいる。一般的に、法学を学びたい学生は法学部に進学する。社会情報学部には、大学で何を学びたいのか決められず、卒業後のビジョンも定まっていない学生が多いという。

この状況は現在も大きくは変わらないが、稲積教授は前向きに捉えている。「入学の時点で明確な目的がなくても、授業を通して物事を自分で判断する力を身に付けていく」。文理双方の知識・手法と、それを生かす実践力を育成するカリキュラムによって、当初は目標をもたない学生であっても、幅広い学びの中から興味・関心の方向性は定まると言う。

常に社会を見つめ、 学びの内容を改善する

社会情報学部は、学生募集、就職状況とも軌道に乗り、教育効果も着実に上がっている（図表）。それでも、「常に社会の情勢を見定め、進化し続けなければならない。本学部は、動き続けなければ死んでしまう“マグロ”のようなもの。ところが、教員も学生も、開学当初の緊張感を保ち続けることは難しい」と、稲積教授は話す。今後は、教員・学生の活力向上と卒業生とのパイプづくりを進める意向だ。

社会情報学部は「リエゾン」と呼ばれる学際領域の教育・研究を特徴とする。教員・学生の活力の向上のために、既存の領域からは生み出せないインパクトのある研究成果を挙げるべく、取り組みを進めていく方針だ。

卒業生には現在、在学生の保護者対象の懇談会で講演を依頼しているが、

より結びつきを強め、学生と関わる機会を設ける予定だ。社会で一定の経験を積んだ卒業生が経験やノウハウを伝えることにより、学部への学びに対する理解を深めさせ、社会に貢献するイメージをさらに明確にさせるという。

社会情報学部は、必ずしも最先端の研究のみを志向する学部ではない。これは他の多くの大学、学部でも言えることだろう。そこでは、教育によって「社会で活躍できる力」を育てなければならない。ポイントは、青山学院大学社会情報学部がそうであるように、大学の学問と社会とを結びつけることである。

この視点を常に意識し、学部教育のブラッシュアップを進めることも重要になる。社会情報学部のように、不断の改革を進めることができれば、あえてキャリア教育を謳わなくとも、学部の専門教育の中で学生は育ち、大学・学部の発展にもつながるはずである。